記念誌「相中相高八十年」　“思い出の記” より

大戦間近のころ

中 38 回卒　荒　義剛 (※1)

貫一がお宮を蹴る姿は、たしか白線の帽子に黒マント、高ゲタだったと思う。この姿はイキであり、『伊豆の踊子』なども、このカッコよさがテーマではないかと思うのだが……。余談はさておき、私が入学するまでの相中生は、その帽章のデザインからして相馬大学などと称して、貫一風よろしく大道をかっ歩していたものだ。それがどうだろう、私たちから突然作業衣風な国防色にランドセルとは！　その姿で初登校の日、うしろから女学生がドッと笑った屈辱を今も忘れない。

在校五年間は、日本が対中政策に失敗し、ズルズルと大戦悲劇の深みにはまってゆくときで、入学時の天皇機関説問題や、二年の二・二六事件、三年の蘆溝橋から本格的な日支事変へ。そして翌年には国家総動員法が発令され、「諸君はなぜ荒木大将が文部大臣になったのかその意義をよくかみしめよ」などと訓辞されたりしたものだ。

そのころの地理の問題に「徐州会戦にわが軍はどのように戦ったか」というのがあって、これは空陸一体の包囲戦と書けば正解なのだが、それが分からぬある男、「天に替って不義を討つ忠勇無双のわが兵は、父母の国を歓呼の声に送られて……かくの如く身命を投げうって戦ったのであった」などと軍歌もどきに書いて先生を当惑させたという。あれはおれだよと名乗ったやつがいて、いまもそいつに会うとおかしさがこみあげてくる。

……　中略　……

事変が激しくなるにつれて先生方はどんどん召集されていった。「この胸に勲章をさげなければわたしは再びここに帰ってこん」と大音声で生徒に別れを告げて、北大出の若い理科の先生は往かれたが、事実、半年後には北支で散華し、使い古された言葉そのままの無言の凱旋には粛然たる思いがした。校葬の日、渡辺乙彦校長の遺影に向っての切々たる弔辞は、会堂になみいる若者たちの頬を涙でぬらしたものだ。そして、そのときまで、戦争が遠い所の出来ごとのように思っていたのが急に身近に感じたのを覚えている。会葬場となった講堂は今や老朽化して、半ば物置然となってしまったが、それでもなお天井などにあのころの面影が残って往時を偲ぶことができる。

過ぐる夏の一日、恒例の「さんぱち会」をひらいた。会名は卒業回数に由来する。集まった者三十余名。近在者はもちろん、仙台、東京からも馳せ参じてくれた。戦後の経年によせて故友の三十三回忌を某寺で行なう。逝きしもの三十名。すでに学年の五分の一である。その多くは戦場に散った。一人ずつその名を読みあげての供養に、ふと「われのみひとり永らえて」の軍歌の一節を思い出した。御坊はいう。「故人は善知識といって、皆さんはこの方たちと永遠に結びついているのです……」……。やがて座を移しての酒席は、お互い肩をたたき合いながら健在を祝福したのであるが、誰の心にも先ほどの寺での暗い思いを消すべくもなく、なればこそ、飲むほどに、歌うほどにいっそう空ろの心が増すのをどうしようもなかったのである。

やがて校歌でおひらきにしようということになり、みんなで大声で歌ったが、思えばこの歌をはじめて歌ったのは、あゝ、はるか彼方の四十三年前！　♪あれは三年前、どころのさわぎではない。呼び戻すすべもない時の流れの速さとその重みに、いまさらのようにおどろくのである。

ましてや、創立八十年!!

（※1）昭和15（1940）年卒　山上出身

（選択&転記　村山）